

グラミン銀行創始者
06年ノーベル平和賞受賞

ムハマド・ユヌスさんに聞く

途上国支援へ一歩

〈バン格拉デシュ・チッタゴンの貧しい農民四十二人に計二十七万を貸したことが、グラミン(農村)銀行のスタート。マイクロクレジット(少額無担保融資)と呼ばれる金融は途上国に広がり、二〇〇六年のノーベル平和賞を受賞した。このほど、賀川豊彦献身百年記念事業のシンポジウムに参加のため来日した〉

三十数年前、米国から帰国してチッタゴン大学の経済学部長になりましたが、自分の学問がこの国では役に立たないと考えました。近隣の農村では、かごを編んだり布を織ったりして現金収入を得ていました。問題は、かごや布を売っても、高利貸のため手元にはその日の生活費しか残らないことでした。先進国は教育や訓練で雇用を増やそうとしますが、途上国にはそもそも雇用がありません。自ら物をつくって売るしかない。だからその元手を与えれば貧困から脱却できると考えたのです。

しかし、町の銀行は貧しい人にはお金を貸しません。まして、社会的地位の低い女性に貸すなど論外です。貧しい農民に実際必要なのは、ほんの少額の融資だったのです。そこで、私

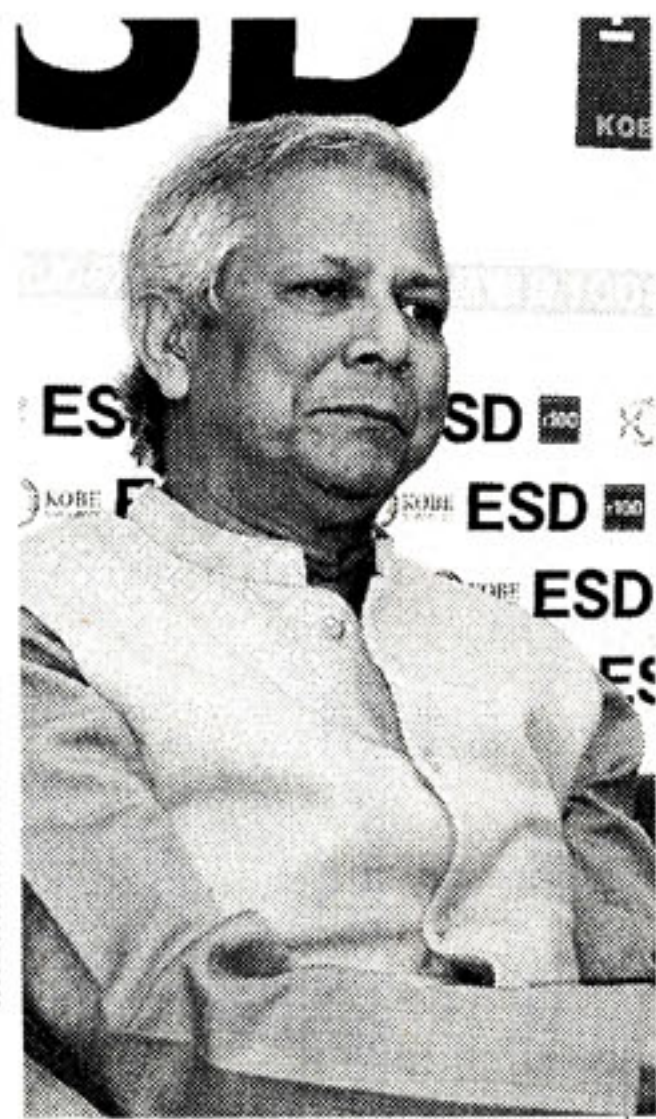
お金をリサイクルする社会を

が自ら債務保証をして銀行から金を引き出しました。最大化」がただ一つのビジョンです。これに對して私たちは、社会の利益を最大化するためにビジネスを始めました。私は「お金の戸口で営業します。担保は取りませんが、子どもを学校にやることを約束させます。」

返済率が非常に高いことに気がきました。銀行は貧しい人に貸したら絶対に戻ってこないと考えていたが、実は逆だったのです。いまでは八百万人の利用者がいて、実に97%が女性なのです。貧困層は確実に減っています。

〈グラミン銀行はその後、携帯電話や太陽電池、水事業など多くのプロジェクトを手掛けてきた。最近、

配当をせず社会のための投資をする「ソーシャルビジネス」が注目を集めている。町では一歩が一歩も



日本の企業も関心持って

るミネラルウォーターを、四割一で供給しています。アディダス(ドイツ)とは靴の合併事業を計画中です。日本の企業もぜひ興味を持ってほしいです。

日、特別な意味を持ちます。金融危機で、これまで最大利益を追求してきた世界の銀行が溶けてなくなり、グラミンが生き残っているのです。

お金は誰もが欲しい。それは否定しませんが、人助けもまた楽しいことなのです。社会の問題を解決するために、お金がリサイクルする社会をつくらなければなりません。メガネを変えようと違つ世界が見えます。同時に生きる目標も見えてくるはず。

1940年バン格拉デシュ生まれ。タッカ大卒。米バンタービルト大で経済学博士号。帰国して故郷のチッタゴン大経済学部長。貧困撲滅のため農村部でマイクロクレジット

(少額無担保融資)を開始。83年に銀行登録が認可され、グラミン銀行創設。ソーシャルビジネスを相次いで展開。2006年同銀行とともにノーベル平和賞を受けた。

「人々は難しく考えすぎる。自然はシンプルです。素人のコモンセンス(常識)が大切で、グラミン銀行もそこから始まりました」と話すムハマド・ユヌスさん=神戸大学